

「ヒトのチカラ。」を読んで

東広島市立高美が丘小学校

第5学年 田淵 惇毅

「ヒトのチカラ」を読んで

五年 田淵 惇毅

七月七日の七夕の日 西日本ごう雨災害で

岡山県の真備町にある僕のおじいちゃんの家

は一階の天井近くまで水につかた。

お父さんは、道路の復旧を待つて二日後に

おじいちゃんの家には片付けに行つたが、お父

さんからラインで送られてくる写真を見たら

家具は重なるように倒れ、床にはヘドロと落

ちた土かべがたまつていた。水道が使えない

から家の横の用水路で食器を洗つているおば

あちゃんの写真を見た時、僕はすぐにでも手

伝に行きたい気持ちになつた。

それから三週間たち、家がだいぶ片付いて

安全になつてから、僕も真備に行つた。

そこでおどろいたのは家具の片付け、かべ

や床はがし、消毒まで終わつていたことだ。

僕はおばあちゃんに何でこんな早く片付

いたのか聞いてみた。すると、

「今のジューン君みたいに、いっぱいの人がホ

ランティアで手伝ってくれたけんよ。
 と、言っていた。
 それから僕はボランティアさんの力が氣になつて、この「ヒトの手カラ」という本を読んだ。
 その本には、筆者の小田原さんが、東日本大震災の後に、宮城県七ヶ浜町を中心にボランティア活動にあたり、た経験が書かれていた。水をふくんだたたみの運び出しの話、心をいためながら仏だんをこわした話、海水で枯れた庭木を切った話。この本に書かれていることと同じような状況やうをお父さんから写真で見せてもらったり、話を聞いたりして、たので、僕には小田原さんが経験した作業の大変さがよく分かった。
 でも僕が一番心に残ったのは、ボランティアの仕事の内容より、小田原さんが被災者の人たちを第一に考えていたことだ。
 たとえ、ヘドロでよごれていても、家に上がる前には土足で良いか確認する。なれなれ

しく災害の話をしなさい。被災の状況ようを写
 真にとらない。ほかにも、仕事は片付けだけ
 ではなくて、写真をきれいに洗うたり、庭に
 花の種をまいてあげたりして、みんなの心を
 いやしてあげるのもボランティアだ。書かれ
 ていた。
 僕が真備に行ったとき、おじいちゃんか、
 「洪水があつてから、涙もろくなつてしもう
 たんじやけど、えり「あ家がなくなつたけ
 んじやのうて、みんなの気持ちがうれしい
 けんなんよい。
 と言っていたが、おじいちゃんの家がすぐ
 早く片付いたのは、小田原さんの言うみんな
 を思いやる気持ちと、このありがとうという
 感しゃの気持ちが重なつて、大きな力になつた
 ためだと思う。
 おじいちゃんの家が、元通りになるまでは
 まだ時間がかかるけど、僕は、電話をしたり、
 手紙を書いたり、仮設アパートに遊びに行く
 たりして、これからもおじいちゃんとおばあ

ちゃんをはげましてあげたい。
そしてまた、にぎやかな真備のおじいちゃん
の家が戻ってくることを、ぼくは願っています。

「ヒトのチカラ」

小田原

きよし

著

マーブルトン

指導者の言葉

本学級では、読み語りと、本の紹介スピーチを継続して行っています。ペアでの本の紹介では、その本の中で中心人物の何が変わったのかを伝えることで、自分の生き方に関わる読みができるように指導しています。国語科の学習では、「本は友達」を読んだ後、推薦図書を紹介しました。その中で「本を読むことで、自分の生き方が豊かに変わる。」ということ学びました。

本作品は、西日本豪雨で被災した祖父の家の片付けを手伝ったことをきっかけに読んだ本について、考えたことが書かれています。本から読み取ったボランティアをするときの心構えと、祖父や祖母に聞き取った被災した側の気持ちを関連付け、被災した人を助けるボランティア側の気持ちにも触れることができます。文中の「おじいちゃんの家がすごく早く片付いたのは、小田原さんの言うみんなを思いやる気持ちと、このありがとうという感謝の気持ちが重なって大きな力になったからだと思った。」は、児童がまさに体験と読んだ本の内容を関わらせて読んでいると言えます。

また、本校5年生は、総合的な学習の時間に「安心・安全高美が丘」という防災をテーマとした「人とのつながりがまちをつくっていく」ということを学んでいる途中です。本作品は、自身の体験と、本とを結び付けてお互いの気持ちを思いやり、感謝の気持ちを持つことの大切さが書かれており、総合的な学習の時間で資料としても使っています。